

急性期から在宅まで、幅広く患者さんの薬物療法に寄与する

薬剤部・薬局訪問 第108回 武蔵ヶ丘病院



【医療法人田中会 武蔵ヶ丘病院】
 熊本県熊本市北区楠7-15-1
 ●理事長：田中英一
 ●病院長：種子田 岳史
 ●病床数：145床
 ●外来患者数：1日平均約170人
 ●外来患者への処方箋発行枚数：1カ月平均3,000枚
 院外処方箋発行率：98.6%
 ●薬剤師数：7名

（2017年11月現在）

熊本市の北部にある武蔵ヶ丘病院は、一般病棟・地域包括ケア病棟・回復期リハビリテーション病棟を有し、急性期から在宅まで、地域住民に一貫して質の高い医療を提供しています。薬剤部は病棟業務のみならず訪問薬剤管理指導にも積極的に取り組み、患者さんの意思を尊重した薬物療法を行っています。その活動について、薬剤部長の畑本慶太先生と、薬剤師の河田優希先生に伺いました。

「コンコーダンス」の考え方に基づき患者さんと一緒に治療に臨む

●●薬剤部の方針と、注力する取り組みをお教えてください。

畑本 薬剤部では、患者さんと医療者がパートナーシップの基盤に立ち、互いを尊重しながら一緒に治療に取り組む「コンコーダンス」*の考え方を念頭に置いて業務に取り組んでいます。また、「薬あるところに薬剤師あり」を実践すべく、一般病棟だけでなく、地域包括ケア病棟や回復期リハビリ

*コンコーダンス(concordance)：「コンプライアンス」や「アドヒアランス」は医療者が患者を管理する側面が強いのに対し、「コンコーダンス」は、患者と医療者の考えが一致するよう、互いの意思を尊重し合うことをいう。

医師の協力の下、入職1年目から積極的に処方設計・提案を行う

●●病棟業務について、詳しくお聞かせください。

畑本 当院処方箋のほとんどが院外処方であるため病棟業務に重点を置くことができ、現在3病棟2名体制で行っています。病棟回診やインフォームドコンセントの際は、できる限り病

棟薬剤師も同行しています。薬剤部の位置が一般病棟のスタッフステーションに隣接していることもあり、医師や看護師と密に連絡し合っています。薬剤に関しては薬剤の専門家である薬剤師に任せたい、という医師の意見を受け、薬剤師は入職1年目から、患者さんの検査値を確認した上で、積極的に処方設計や処方提案を行っています。それをもとに医師とディスカッションし、実務を通じて見識を深めています。また、医師の求めに応じて外来診療に同席し、処方の相談にも応えています。



薬剤部長
畑本 慶太 先生

河田 病棟では毎朝看護師の申し送りに参加し、患者さんの状態把握に努めています。その際、病棟で医師から質問があったときにすぐに答えることができるよう、薬剤の変更・増量などを想定しながら話を聞き、事前に下調べをしています。



薬剤師
河田 優希 先生

入院時の初回面談では、自己管理できていたかなど、ご自宅での服薬状況を詳しく聞きます。入院中は、退院してからもしっかり服薬できるよう指導していきます。指示通りの服薬がで

きない場合は、退院後の患者さんのライフスタイルも考慮して剤形や用法を検討し、医師に処方提案します。
畑本 日頃から処方設計・提案を行い、医師からの厳しいチェックを受けるといった経験が、若手薬剤師にとって良い学びの機会にもなっています。

訪問薬剤管理指導では薬剤以外の観点からも患者さんを見る

●●訪問薬剤管理指導を開始した経緯と業務内容をお聞かせください。

畑本 病棟で指導をしても、退院後ご自宅に戻れると、服薬管理がうまくできなくなる患者さんもいらっしゃいます。そこで、退院後のフォローを十分に行うべく、2015年から訪問薬剤管理指導を開始しました。現在、薬剤師2名体制で5～7名の患者さんを継続的に指導しています。

1回の訪問に要する時間は約20分で、訪問回数は月2回です。薬剤の保管状況や残薬の確認、服薬カレンダーや配薬ボックスなどへの薬剤セットを行ったり、患者さんの相談に答えたりしています。

患者さんの当院外来受診時には担当薬剤師も同席し、医師の説明や患者さんの訴えを聴いているため、訪問時にも状況を十分把握した上でお話ができます。

最近、近隣の保険薬局も訪問薬



訪問薬剤管理指導では、薬剤以外の患者さんからの質問にも丁寧に回答。

提供：武蔵ヶ丘病院薬剤部

剤管理指導の体制を整えてきました。そこで、保険薬局と相談の上で、次のように役割分担しています。

病院薬剤師が担当

■薬剤の変更が多い患者さん
 理由：処方内容に関する検討・提案が行いやすいため

薬局薬剤師が担当

■飲み忘れが多いなど、服薬に問題がある患者さん
 理由：頻回に指導できるため
 ■複数の病院を受診している患者さん
 理由：（特にかかりつけ薬局は）患者さんの情報を一元管理しているため



薬剤部の皆さん

●●訪問薬剤管理指導では、どのようなことを心がけていますか。

畑本 患者さんからは「検査値の意味を教えてください」といった質問も多く、訪問時には過去5回分の検査データを持参し経時的変化を示すなど、薬剤以外の質問にもわかりやすく回答するよう心がけています。

実際に、患者さんの質問・相談内容を調べたところ、薬剤関連が5割、検査値の詳細など診察室で聞けなかったものが3～4割でした。患者さんとの会話の中から重大な問題を見出すこともありますから、何でも相談してもらえたい関係をつくることは、非常に大切だと実感しています。

河田 訪問の際は、室温や衛生面などにも注意しています。夏場は熱中症対策を、冬場なら手洗いの励行、インフルエンザワクチン接種の推奨をしています。患者さんの事情に応じてホームヘルパーやケアマネジャーなどにも連絡し、情報を共有します。

入院から在宅まで、患者さんから更に信頼される医療を目指す

●●今後の抱負をお聞かせください。
河田 当院は高齢者が多い地域にあ

ります。患者さんには呼吸器感染症や尿路感染症が多いため、抗菌薬の適正使用が重要です。更に腎機能が低下している方も多いので、検査値を考慮した薬剤選択や用量調節も不可欠です。医師の指導も受けながら勉強に励むとともに、他施設の薬剤師とも意見交換を行い、様々な事例を参考にしながら学んでいきたいと考えています。

畑本 当院は基幹病院と比較すると症例も限られ、また薬剤師数も少ないため薬剤師同士の研鑽にも限界があります。

そこで、中小病院の薬局長で構成されている熊本県医療法人協会の薬局長会では、若手薬剤師同士の交流を兼ねた研修会を企画しており、当院の薬剤師にも、見聞を広げるために積極的に参加させたいと考えています。

在宅医療については、保険薬局との情報共有が必須となりますから、今後は熊本市北区の病院薬局・保険薬局合同での勉強会や研修会を通して連携を図ることも構想しています。

外来にも専任薬剤師を置いてほしいとの要望が医師や看護師からあり、外来での薬剤師活動も考えています。今後も、患者さんを中心に据えた薬物療法を通し、更に信頼される薬剤部を目指して努めていきたいと思